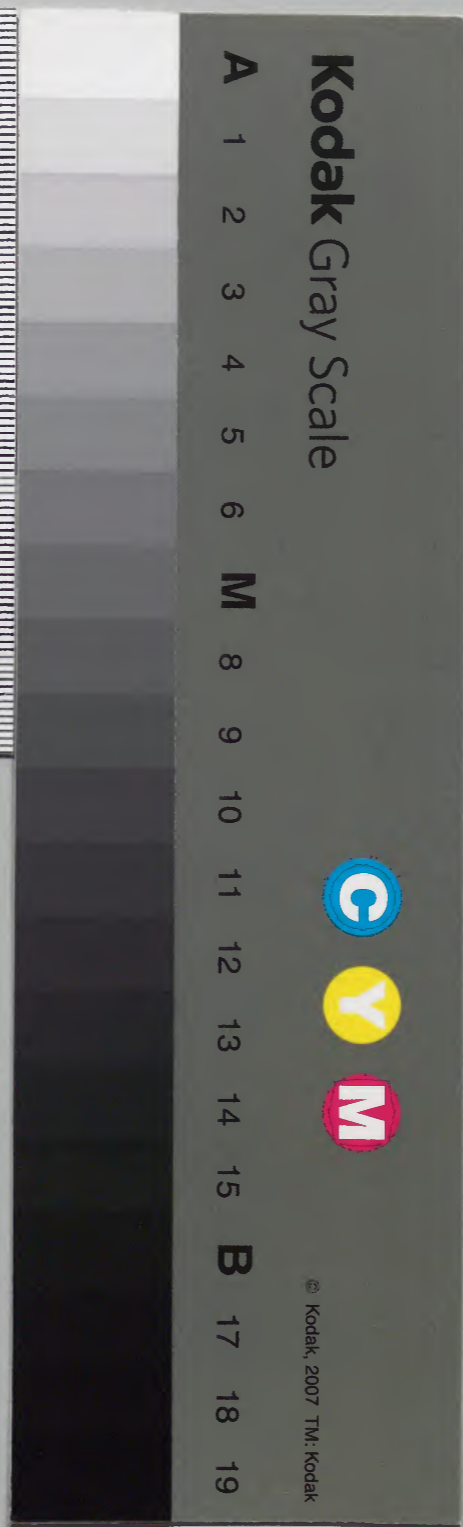


# 貞丈雜記

大政官文庫			
三	二	一	和
冊	架	函	書
		一 二 三 四 五 六 八	門

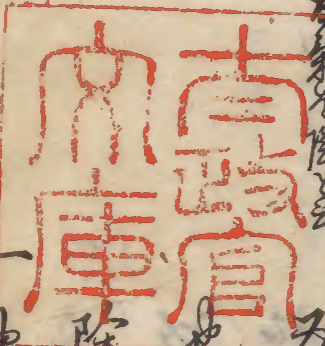
內閣文庫			
三	二	一	和
函	冊	架	書
		一 二 三 四 五 六 八	類

內閣文庫	
番號	和 11568
冊數	32 ( 30 )
函號	212 17





天地の間の気の  
はひを衆を陽  
とひかきまほ  
衆を陰とひか  
きまほ衆を  
陽とひかきま  
ほ衆を陰とひ



物数之部

祝儀は七五三の教を用ひたり一三五七九を陽教といふ  
二四六八十を陰教といふ陽ハ物を生ずル成をせしむ

氣ハ陰ハ物をかゝるかす氣ハ依ハ祝儀ハ陽教  
を用ヒ陽教の内も初の一と終の九を推テ中の七  
五とバウリ用ひハ陽衆のやうんあま衆をとり用ひ心  
也物の初ハよハ一終ハおとろろ依ハ初の一と終の九を  
除く

神道ノハの教を以テ教多キ依ハ出ル事一より十迄の

内初の二と終の十とを括て残り教令之始もあはれ  
もあはれかぎりあき心へ八百万八千代八雲あとの八の字  
皆依りあはれ教あき依あり

折一合と云ハ二合の多しと心持する人をおやうあり  
了の多しと云ハ一合二合と云ハ二合と云ハ唐櫃  
あき一合二合と云ハ二合の多し合ハ盒の畧也  
之盒ハもことと云

一具と云ハ何れをも對し拵ひたる物を云わすけ行  
膝まあは袴肩衣もいふあどの類ハ一具と云  
桃子テウシをバツと云ハ二枚と云ハ一葉と云ハ一葉あり

一鞍クラ古轡クツハ一口とあるをひとくちと云ハ一ありといづと

よむべし上古の書ハ太刀の章を。一口二口とあり又  
種一口鈴一口あはれも何れもいづと云ハ

燈ハ一領と云燈ふかぎらず小神をも一領と云ハ領を  
名をよむと云ハ名をよむものハ皆一領と云ハ

胃カブトヒトハチ一割と云ハ敵の胃を多細し武雜書ハ篇云胃  
一割もぬと云ハまきると云ハ名をよむと云ハ割の字ハ首を割

るの字之係ハ身方の胃をハ割と云ハ首をいして一頂と  
いふは頂ハいふと云ハ首をいして一頂と云ハ首をいして一頂と  
といふの字を知ぬ人あり

節用集胃一  
割此字ハ忌テ  
不書也

殿中日記云詰  
 奉公山田の二尺  
 奉行方を奉公  
 元と云山田の氏也  
 老仁別記云雜字  
 船二鯨ト云魚  
 一尺斗十ルガ飛入  
 ケリ疎忽ナル者  
 取テ海へ投入ケレ  
 バ暫有テ鯨一尺  
 飛入又云是ヲ  
 見バ鯨鯨ニモ  
 限ラズ一尺ト云

一 鮭サケおがざうして一尺二尺と云ふあまり大草取お傳  
 書よ鯨一志やくと何り一尺二尺と云いそれつむひ  
 あまり一尺以上の魚の大なるをが一尺二尺といふ  
 又云鯨を一尺二尺といふ一ニヤク隻の音をうけてあまり  
 と云脱あり隻の字はかしくともむまると一ニヤク隻といふ  
 ハワの字は鯨をかざうして一ニヤク隻といふわけもあつ何れも  
 了の字をハ一ニヤク隻といふべきであらばけ脱も用ひて按  
 ぶるよあまり記はあまり大草取の書よ鯨を一尺と  
 いひり鯨も鯨も魚別より出る魚かかかかかかかかかか  
 て魚を一尺二尺といひ習はしむ鯨鯨を他國へ送す

一 一尺二尺の多軍  
 係すあまり  
 一尺二尺の多軍  
 の多軍二尺の多軍  
 と云ハ二張の多軍  
 一尺二尺の多軍  
 一尺二尺の多軍

一 尺二尺といひてつのはたる他國もさき詞をうけ  
 て一尺二尺といひ習はしむあまり一尺二尺の多軍の多軍  
 出するあまり  
 一尺二尺の多軍二尺の多軍と云ふ多軍のけづりんををあまり  
 不しくとにぎうて一極を一ちうと云ふ馬秘流お札  
 雜字の多軍の多軍  
 一尺二尺の多軍二尺の多軍と云ふ多軍のけづりんををあまり  
 一尺二尺の多軍二尺の多軍と云ふ多軍のけづりんををあまり  
 一尺二尺の多軍二尺の多軍と云ふ多軍のけづりんををあまり  
 一尺二尺の多軍二尺の多軍と云ふ多軍のけづりんををあまり

一 たうぶう「おのうたうげう」の手の定あぐくさる調  
の教のさるす

一 物の寸尺を定むるは、右の陽教を用ひし、凶るは陰教  
を用ひし、陽教ハ一三五七九之陰教ハ二四六八之又右  
とハたとハ二丈四尺よりよきおも是ハ陰教ある方一寸の  
又一寸う三分も餘計をさしき、是陽教を用ひし  
凶るは一寸の三丈五尺よりよきおも是ハ陽教ある方  
二寸又三分四寸も餘計をさしき、是陰教を用ひし  
陰陽の教をさしき用ひる者、凶るをさしき、吉凶をさし  
ハ礼あり

節用集云弦  
廿筋曰一桶七  
筋曰一張一ヲハ  
曰一筋也ト見ユ

一 酒一献二献一度二度とさる、酒盃之教の記也

一 弓の弦ハ一條二條と云又一筋二筋とも云、張と云ハ  
七筋を云一桶とハ廿一筋之桶と云ハ、弓の  
弓の物ハ廿一筋入て、途上より、替弦を上古ハ副弦  
とも殺弦とも云

一 弓の弦をハ、弓と云ハ、一不不不とハ、石云

一 墓目一腰と云ハ、四寸の弓、大追おの寸の弓、さる  
云、さる、び一束とハ、廿の弓、廿一以上ハ、廿一廿と云  
ハ、又異統ハ、一束とハ、四十の弓、一把とハ、廿一の  
弓、是仁田右馬助の祝、射、方、さる、さる、射、祝

用ひつゝ

一 矢二枚を一本と云ふハ的矢はかぎりたるもの外の  
矢を一本二枚といふの事しき一ツニテ一ツト  
と云べし但一本四目一本神代矢といふ事あり  
あれは一本といふべし

一 物の数の云種武雜書札道照愚考ありあり畧之  
保侶衣を一本領二領と云保侶衣一本領と二代家  
巻敷を一本杖二杖と云カニシユ 夫敷ハ祈禱の札也 又一本葉エダと云  
涉稜を一本合二合と云シノキ 是二合と云は、  
勢也書札葉なる事 大永五年の古葉也

一 舟の敷をひと羽か二羽と云ふは、舟の羽は限りたる事  
外の事よりいふべし

一 靴子を一本二枚と云ひは、けを一本二口二口と云べし又  
靴子を一本二口と云ふは、

一 小袖一重と云ふは、小袖の款より

一 厚風かきと云ふは、ビヤウフ 保氏あがき 又一隻と云ふは、  
志月ハ一本と云ふハ唐記ハ一本と云ふハ一頂と云ふハ  
箆エヒラを一本二腰と云保元物語ハ是を云ふ

一 雲又ハ腕鐲の敷を一本二挺と云ふハ挺ノ字ハつ元と  
よむ字ハ雲もらうと云ふも枝のこゝろ細き物也

一挺二挺と云く何れもわをもぎぬを一挺二挺と云  
ハ皆同じ心一丁二丁と云ハ挺の字むづつ一と云ハ  
略して挺の字の代り一丁の字を修るは用はし

一輿コシあを一丁二丁と云ハ丁ノ字あると云む字を  
一人あそ二人あてと云む一人ま二人まと云む

一布ヌノキヌ縮あどの敷一疋を一匹と云又一むと云むとも  
いふ字活拾遺物語七布一むと云むいづくこれあの

男よと云せよ畧中は布一むと云むたれバ男あをもす  
あり不得と云うと思ひて云く日本記孝徳天皇田一町

縮一丈四尺成疋ムラトと云は疋ノ字ムラと云むと

一綿ワタイクダシ幾屯と云屯の字あると云心軍陣の人敷を

屯するとも人敷を集むを云綿一屯の時ハひと  
ゆちと云く倭名抄又唐令云縣六兩ハ屯屯聚  
也倍一屯トモチ後疋度チト毛遲

一晝夜の時の敷をおつる昼六時夜六時の時を身一と

く屯の時を身二と云く亥の時を身三と云く卯の時を身四  
と云く辰の時を身五と云く巳の時を身六と云く是陽の時

午の時を身七と云く未の時を身八と云く申の時を身九と云く  
酉の時を身四と云く戌の時を身五と云く亥の時を身六と云く

是陰の時之時の敷をおつるハ一時を十の敷と云て

才一の時をば一をうけひくはつて残る九つをおく子時才二の時  
 をば二をばあどして残る八つをおく巳の時才三の時をば  
 三をあどして残り七つをおく外時才四の時をば四をお  
 けして残り六つをうけ辰時才五の時をば五をうけ  
 して残り五つをうけ巳時才六の時をば六をうけ  
 して残り四つをうけ未時才七の時をば七をお  
 けして残り三つをうけ申時才八の時をば八をお  
 けして残り二つをうけ酉時才九の時をば九をお  
 けして残り一つをうけ戌時

一 屏風一よりひとの二双のる一ひとが手紙下より葉花  
 一 みるくほあみるく二よりひとほ氏皆一對にほ氏なるほ氏日本記は一具  
 の字をほ氏一よりひとほ氏をたをたの具立てたをよよりひと  
 とくはほ氏をよよりひとほ氏小道具をよよりひと具したるほ氏

言語之部

言語のまゝ意を知りしれが書を  
 よめとも心持かきするあり加記し

一 何り一殿と云殿ハ宮殿の殿とて殿形の事一ひとがの殿ほ氏  
 をあまへる人神ありありやまひして何り一殿と云  
 たとへば右神宮ハ幡字あどの字の字の心へ海人  
 藤茂云於内裏殿ト申ハ執柄家之外不可有ほ氏  
 関白殿ハ意義ハ其攝政殿何るヲ申サルハ其於ほ氏  
 申スニ他人無異也親王ヲバ於内裏何殿トハ  
 不也

一 何り一板の板上古よりある事ほ氏京於將軍時代ほ氏



つれなきある  
 はあきぬのり  
 き女房トアリ  
 内方内ト三回  
 シ廻く  
 永享九年將軍  
 義教と濂倉後  
 領持氏ヲ征伐セ  
 ン為ニ事ヲヨセ  
 富士見ニトテ駿  
 河ニ下向セラル、  
 時飛鳥井雅世歿  
 供奉シテ留聖記  
 行ヲ書レシ其発  
 端ノ文ニ公方極富  
 士御覽ト書レク  
 リ此頃既ニ極ノ  
 宇ヲ用ヒタリ

應永記小大青  
 揚テヤヤウ天下  
 之及の名指大内  
 左系大夫義教  
 道をこれと思ん  
 身のともハオモ  
 法而極の由不  
 かけしと名案  
 かけし我をこ  
 涉所極とい義  
 儲ををさし之  
 濂倉年中行吏  
 二濂倉内而ノ  
 るヲ皆何極  
 ト書テアリ事  
 徳三年ニ書タ  
 ル書ニ東山極  
 代ナリ

公方極等持院殿極あどく云ハ中政よりのもあるし  
 されども平人の極をなすもハ旧記は元々平書札の  
 旧記も皆殿をうりて極の所法あり道徳思系  
 とい何殿極の極の字のあり正極ハあまききる  
 但更しうり書るものと極の字當院のやうハ  
 といも正極ありと云ふ能く可加分別ニ用書記  
 云云是才也状は先代を何院殿極といハて尋  
 持院殿とバウリ在るも勿論之者尋方は分也  
 此云云ル人かハ一箇は代に涉就涉不を極と  
 書するも又一可極此云云り向ある院殿と殿せん

一書ヤウ一院と云ハ中政之云々真丈按不旧記  
 ハ公方極と何り又私極とあり上書極下書極と云々  
 とも有るハ是又公方とバウリ云々ハさしつて極あり極  
 公方極といふは公方むきと云ふは私極ハ私むき  
 といふ極ハ上むき下書極ハ下むきと云々  
 左書極智欲<sup>ル</sup>謀<sup>セ</sup>計<sup>ト</sup>志<sup>ヲ</sup>案<sup>ニ</sup>執<sup>ル</sup>案<sup>ニ</sup>指<sup>テ</sup>の引<sup>ル</sup>物<sup>ト</sup>之極也  
 殿中極のり内々兼ハ一とて新殿極案を御り  
 云々殿中極とい殿中向といふも  
 何寺何院何軒何庵何富云々寺院軒庵無  
 皆何殿の殿と同意あり極は是ありハ殿文字付る

事上古の法之節於好軍時代より申比より版を  
を付てよびあり一旧記は善法寺版聖徳院版  
之室院版実相院版ありあり本或ハ版文字あり  
トきてあり

昔ハ祝儀の多ハ病氣と云るを病て病案といは  
て歡樂といひける者ハ祝儀を多とてハ故の  
詞中にも多きを急したる又祝儀ありても版中  
まても歡樂といひて旧記は之の版中次記云  
依歡樂不悉之時志兼日以法文狀て之ハ版中  
目く記云 寛正六年正月 版中一獻 如例檢校  
十四日之案 入夜松涉庭

東鑑卷三十一云  
嘉禎二年丙申  
正月十一日巳未  
晴挽飯抄法  
今日不被上法  
蓋依歡樂  
出法之故也

和能能立と昨夜之觸申涉方ハ涉何儀之外爰飲  
始涉何儀英涉供元以例年涉何儀但一色式部少  
輔及細川右馬頭及此其不無之依依歡樂死之  
樂と書てよう二びたてしむむ之痛と云るを忘  
て歡樂といは梨子といふをありのこまを同じ  
心之と云うを云と  
梨子の云シト云  
心ニテイムナリ  
貝合セといふはよろりかぬ詞託貝おんひとつ  
面又貝おんひと云て一増入祀よおん貝かけあり  
貝おんひといふはつと一孝深平盛表記明月記  
等も名元たり又和好法師の言ふを

天子ノ作ヲ書ク  
ル文ヲ字々ト云  
類政ノ字々ノ  
内法文ニ示下出  
レタルノ未詳不  
ク二見ナリ是古  
風也

このうらのもろくろを見ありせとておろろとあれ  
ばうひあひせともいふべきありあれども款合者合符合  
根合者の合は符をくぬ具おろひといふをよとす  
貴人の食物をあぶら油膳かあぐと人のいふは補き  
初といふは供所といひ多しともいふ方よといふ供  
所とすともいふ也

一 示といふ詞を今時の貴人よ對していありごとと云  
り古いあきとて古い公方極一も示と申しごと武雜書礼  
篇に就何と依て成下所内書に律頂載先以示を存は  
又云去月廿八日所教書今月三日玉来畏頂載仕は初以

一 示を存はあぐと云ふ言あり所内書も所教書も  
亦極の由を書てそれを頂載して示といふは能きと  
いふ詞は近代のあらはしは貴人へ對して云ふと痛  
かた下とすも氣もあつと云ふこととハ穢き志は貴人  
ハ所目もあつるあり難きありあふめ一と出されて所  
目よかや難しとすもあつは目よのりしとて  
悦ぶ心と又悦がくも悦ぶ心は悦がくしとすは悦ぶ心  
悦ぶ心と悦ぶ心と悦ぶ心と悦ぶ心と悦ぶ心  
一 かこいすもと云はかともいふは貴人主人の威勢をおと  
る心と畏の字をかこいすもいふはあつとすもいふは

畏入ゆあざり云々古き状あるはむしと時ひき  
 まづこゝろをかゝるもあはれも貴人をおとれつゝこ  
 てけしむ心こむはるゝとありをわかゝるゝ  
 是も貴人の作をおとれ傳へむは承知せむをまじ  
 と世ひびきをおとれつゝ一々せむをわかゝるゝ  
 かゝるゝとあはれもあはれも貴人をおとれつゝ  
 府まゝに正座のみをうゝ一々せむをわかゝるゝ  
 いまゝのこのあはれつゝを今いとせむ書と云とのあは  
 宿世と書しともと家方よはとのあはれつゝ  
 為書日をば上見云々又<sup>チヨクニキ</sup>書りともと為書日といは後き酒

古記ニ荷用ト  
 アリ官仕ノ事也

一 湯のよひとひ又湯のよひと云はは家仕のよひ也テナガ  
 云もは家仕のよひと心持する人あり湯のよひと云はは膳次  
 湯次の名と持行ては家仕のよひと云は湯のよひと云  
 以上家方よは酒を九こん餅をかちん味噌をむ 塩を  
 志ろあぢと云はる官物よは吳名を付てせむるゝ也惠命  
 院僧心の時代の人 書並れ一海合深芥と云書よはるゝ  
 共以於軍家の女房元もそれを學びて吳名を  
 されゝと云吳名の上賜也と記よはるゝ  
 一 弓射ると云はる能い弓を射るとをの字添ていふゆゑ  
 的出張記よはるゝたり

今時人の兄をあとにきこひ伯父ををらきあぐりたる  
阿にきこをちきみといふ事をこの事を畧してきこ古  
ハ兄君伯父君あぐりいひこ

— あにごあまごおぢこおむごあぐのごハ母の孝こや  
まひて弟とまじし弟ハ弟前を畧したまこあははあ  
祿はあといふこ一説はあにごあどのごハ母の孝こ  
いひあやまるといふお母はあまはあ娘はああぐ  
ま同者よりなり

— 又のるを昔の人のおやあや人又おやあやまのこまハ母の  
を母と人といひ兄のりを見と人あぐりいひここの

世の人又のるをあやとといひあやと人といふるを略して  
あやとといふなり

— おぢのるを伯父叔父といひおそのるを伯母叔母とあや  
係ハあまといふむ叔ハおとといふむとされバ父の兄ハ伯父と  
又の弟ハ叔父と又のあまハ伯母と又のいもハ叔母と  
母の兄才もおと目ト近世又盲ある人伯叔のといけ  
をあぐりて父方のおぢおをを伯父伯母と兄ハ母方  
のおぢおをを叔父叔母とあぐる人ありあやまるとい  
カウゴ

— 雜合期又不合期あぐり舊記はあはるあはぬと  
いふことあり

又伯仲叔季ト  
云事アリ伯ハ惣領  
ナリ仲ハ二男ハ叔  
ハ三男ハ季ハ四男  
也伯父仲父叔父  
季父ト云モハ事  
也又ノ三ハソノ身  
ヲ叔父ト云四ハソ  
ノ身ヲ季父ト云  
父ノ兄ヲ伯父ト云  
ヲ也

一 相宅と日記はあるハ物發しめのたつて一カニシテ

一 仕合悪あゆと日記はあるハちやうど能くといふ物を志あハ

まのもののあはぬをこそ不業の心といふあ

一 難有ゆと日記はあるハ是ハあはるハまのあはるといふ

りて糸ト云業はあはるどあはるの難記を云

一 多由辨と日記はあるハ多物辨之今時の初またいも

なのと云る同ハむかえれもむる心ハあはる云

辨と云る同ハ云

昔ヨリ此比ノ字ヲ用レ日本ハ比ノ字ニハラス

比真と云る日記はあり 鱗川記ハ比真とあり 派の字

を用るをよとす 派興といふもあはるといふもいふ

一 尋常といふ日記はいろいろもあはる 尋常と書てよつて

と云いし何れを云るも 吳語あはるすあはるすか

人のめもいふすいひぐんあはるす尋常と云い 道具はあ

ても何物とも尋常の西アあはるかあはる 辨はあはるを

考と云い今時ハ人の名もあはるを云いあはるあはるを

尋常といひは具於あはるを云いあはるを尋常といふ

あやまの庭刑徒奉尋常の村といふと云るあはるを

よのつ年十人あこの村といふと云るハ下子よの船あはる

矢あはるハ尋常と云るあはるを云い

一 人の事を知りてそのものなりと云ふは物やと云ふと云ふ事か  
どしきいふ事もあるはどしきより出せどといふ事あり  
これら八人も初て知れしかぬ事あれども古より此  
風俗の傳りたる事かやうの事もむつと云れが不審な  
あつた事も記さるる人の知るる事後には知れぬ  
事もあるし

一 故實コガツと云ふ詞は唐土の書より出るる事史記魯世家注  
云故實故事之是者云云はむの故實といふはゆりさるるのよ  
き事と云ふこと云ふこと又文選四十六人は云故實先王  
之道也云云は心の故實といふはむの天子禹王湯王

一 文王などの定の事れはるるをいふと云ふは日本といふも  
その方とていふ事神武天皇以来定の事と云ふはるるを故實  
と云ふ事あるは相胡依以來京都將軍などの定の事  
と云ふるを故實と云ふはむの法武の事を故實と云ふは  
祝儀といふ詞の事書札の類は云々なり  
一 福あき人を云ふ事といふは初近世の詞はあき事ありあり  
鎌倉年中行る正月十七日涉的の事云々是の人射子  
人教と云ふ事射子の事合勤之と云ふ又此二年謙信  
左近大夫貞説る格別雅致と云ふ事是と條親侯と云  
杖持と云ふ事知れを宛行ふ可し何貫文と云ふ事

式ノ眉ふとを四季  
の眉と心はる四季  
よりして作の趣か  
るるあつてさあ  
やまうて式の的を  
四季の的と心は  
るるあつてさあ  
やまう

故宛行あき人をもきとてし料はあつてし

くもあつてと云何日記はあり花飾と書くと何の何

猪搦とあり同日一過藏と書くる本もあれとあやまうて

合点とあり書札の款よりあす

式正といふ日記はあり是ハ親式を正し時の事又式と

汁のり同日意之式正の時式正の膳式の立文式の大的式

の眉あつては皆同日意之奉式と云心也

頓て又徳と云何日記はいつてもありやとてとあはあま

と云ふ同日一徳と書くるをさういふあはあま

とみと云何頓の字とやとてと云ふ同日一何あり

あつてと云何古いあき何と云ふくさつてと云ふあつて

小神のしめみ対して云くさ料理七五三の膳款あつてと云くさ吸物軒のあつあつ対して云く

さ帯下げ帯対して云くささささこころをささぬ対して云くさささ色指の

芳ハきぬま色むあつてと云又ひつてと云あつてと云くさささ是等の

何皆本式もあつてと云物ありと云と云るを付してと云

これら何皆今世の何と云うと云あつてと云何と云何と云

花をおと云何人の衣裳あどの神を外出立のあり

さ帯をさあやうふと云うと云あつてと云るをいふと人唐記は

行列新調は花を折てと云と云と云と云何り又一条巻



良の天象往來より面々如立可立折花の中兼及はあり  
 東鑑卷世嘉禎三年二月二日条より出俊又殊被刷カイワケ  
 供奉人清撰各行粧殊折花太平記卷三主上笠置  
 法没落案云同十三日小新帝登極のよしよし長持堂  
 よりだつり入らせ給ふ供奉の法は花をおえ行粧引つらふ  
 雜事雜役雜用をその雜の字をくくつらふよし  
 と書てもくくつらふよし  
 且雜の字のむこふあり  
 をと江戸の初よりいふごとくともまたいふごとくとも  
 とありあり  
 キヨイ  
 湯意を得ると云人のあひ入料管をたつらふよし

古き状の案文は披巻状の書との前より始り意ゆと  
 けり又言あり是ハ向の奏者ふせをて披巻を正く  
 頼といふがよし此意を正くゆと云は此意と云ハ作と  
 云ふよりいふと母ハ貴人の所初を此意と心得るハ  
 あやまり也此意ハ此ららるゝ貴人の所初を古ハ所チヤウ後  
 とのひり上意といふもそのはいらるゝ作の意ハあは  
 一人唐記ふたふだの所行と云ふりまたふたふたを  
 け志のふたふた保彦を志の忠教が家記也  
 東照宮所立服ありてたふらふと作ありるえらり  
 昔よりの初ハ節用集田記田似齋香物ハ人撰齋者



一 涉の字ハ元來天子の涉車斗ハ涉の字を付てこれを  
にあらざるべしとて其人の多きは涉の字を付てし  
涉の字ハ馭の字と同一字とてむまの字とよむ字あり  
天子ハ馬を自由自在ニ乗らば其如く天下の人を  
自由自在ニつゝひあかぬ涉の字を付てし涉の字  
を付てしとて其人の多きは涉の字を付てし

一 今武家の供の若老はまて乗言はばしとて其の上古の  
警蹕ケイヒツの儀凡そ警蹕の多は官位の高き記しとてあり

よみん考ケイヒキトベヨムナリ

一 ことせんあれ又ことせんあれとて其の多きは事ありことせんあれが

ことあるなれとて其の多きは事ありことせんあれとて其の多きは事あり  
ことせんあれとて其の多きは事ありことせんあれとて其の多きは事あり  
やうの多きは事ありことせんあれとて其の多きは事ありことせんあれとて其の多きは事あり  
あれあれ又あれとて其の多きは事ありことせんあれとて其の多きは事あり  
おととあつとて其の多きは事ありことせんあれとて其の多きは事あり  
涉取の多きは事ありことせんあれとて其の多きは事あり  
料理とて其の多きは事ありことせんあれとて其の多きは事あり  
食料とて其の多きは事ありことせんあれとて其の多きは事あり  
料理とて其の多きは事ありことせんあれとて其の多きは事あり  
料理とて其の多きは事ありことせんあれとて其の多きは事あり  
料理とて其の多きは事ありことせんあれとて其の多きは事あり

食入食物を潤るも食物を取捨つるひとのあまじ  
ゆへ食物を料理するも食入食物をかきうを料理と云  
ふにあらざるべし

クシヤク  
狗惜と云詞古書ありかひもいふもいふもいふも  
むろをきしきひのいふもいふもいふも

ヨクリウ  
押留と云詞古書ありあまをいふもいふもいふも  
古書ありかひをいふもいふもいふもいふも

字也すもいふもいふもいふもいふもいふも  
すもいふもいふもいふもいふもいふも

ワびらと古き書ありあまをいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふも

一 されど... いたされ... せし... 物... 事... の... こと...  
 一 目... され... こと... 物... 氏... 物... 外... 古... 事... あり...  
 一 一... づ... ころ... 小... 舎... 人... こと... あり... 枕... 草... 紙... あり... こと... あり... こと... あり...  
 一 され... ころ... たり... たる... こと... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...  
 一 園クダの... 子... こと... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...  
 一 孔子... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...  
 一 白状... こと... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...  
 一 陳を... こと... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...

原氏物終の宴  
 の巻... こと... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...  
 一 何と... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...  
 一 紙... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...  
 一 園... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...  
 一 孔子... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...  
 一 白状... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...  
 一 陳... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...

一 何と... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...  
 一 紙... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...  
 一 園... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...  
 一 孔子... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...  
 一 白状... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...  
 一 陳... あり... こと... あり... こと... あり... こと... あり...



寺と云ふ者もどけおありしおのりしとて元興寺の鬼をみし

侍るといふ詞は儀と云と同一詞也侍と云ふは

見糸と云ふ人のおと糸とて對面と云ふし又物を人

に見するも糸とて見糸と入るも古の詞也ザン

種管といふものを古書にけいめんと云ふケイエ

のたふ種管といふ事をいふもいふもイハハ

さんざんといふといふ詞はたゞと云ふといふ詞也

如法といふ尋常と云ふ同一別は別なりと云ふも

を云ふ如法は對して如法といふも如法は法をいふも

意外といふおんまのりのおと信て思ひの外といふ詞

人今江戸とて無礼のものを意外といふは非あり

一心といふ文字の通うといふ法なきとて母心の如く

云ハ遠慮もあく人の物をあやむと云ふとて對人の物

をいひゆるむをまじむといふもいふもあやむと云ふを器

をいふ詞也

計會といふ詞古書より計會と書くもいふひあり

と云ふもいふも何なるもいふも品のもの彼と云ふといひ

合せるもいふもいふもあちあひるをいふ

たのせともおのともいハ我身のものといふ江戸の詞也

うぬといふおのといふ詞のあやむといふうぬれといふも

和漢朗詠集の  
詩は今日不知  
誰計會セツ春風  
春水一時未と  
白居易が詩也  
春風と春水ト  
ケタル一時は来る  
水云ハ誰が計ひそ  
一時は風と水と  
會合するやうふ

あつたの知す  
と云ふ事

一 けりまひと云ハ振舞とも挙動とも書こ人の身の  
 かるまひと云ハ振舞ふ人あまよ食物を食むる  
 をるまひと云ハあやまりこをれはまけんあつと云  
 ありまひと云ハ又あつけとも云響意の二字ハ  
 但響意をるまひと云ハ馳をまると云む馳  
 是の二字をせしめてまひと云て真まひけり  
 てあのもけんあつと云するあまひと云ハ古書  
 ハハ響意をるまひといひまぬこ響意の一字  
 あまひと云ハまひと云ハ原はあつと云る  
 一 候コウまひと云ハ侍と云ふ同貴人の出あはれる

半を云又何この役は候まると云ハまひを主人  
 の為ハ勤るを云ハ  
 一 人は物を追はまひと云ハまひと云ハまひと云ハ  
 畧語あり  
 一 清なる又おまひと云ハまひと云ハまひと云ハ  
 清なる又おまひと云ハまひと云ハまひと云ハ  
 一 壬生忠見の家集は初書はあまひのひ直垂くれを得る  
 せん有とあまひ裏とらをあん失とらをあん失とらをあん失  
 けりまひと云ハまひと云ハまひと云ハまひと云ハ  
 いと云ふ事すなわらうと云



一 ありがらむといふは又とありのまゝに書するは

びんありといふは使と書して便宜あり

一 己のハ我といふは我は己のハ何れも人の身をと

て言詞へ又思ふれといふは世の世の世

一 さんるといふはさうさうさうさう目侍候

一 魁弱といふは弱は是なり魁弱の字本多ハ

也キイサシともヤマヒトともよむ字之弱ハヨハシと

よむ字之病人あとのめくよハさをさく魁弱の官

人又魁弱の訴訟人あつてハ皆そ人威勢も

あつてハさうさうさうさう

つれづれ未遊  
あつてハさうさう

一 志つらといふは先礼の二字と無礼の事又病氣の事

を志つらといふは先例の二字と不例とも目

るこ又病氣の志つらといふは志つらといふは志の

くろいの器器之 三好寺清成記は此中志先礼を以て志  
ハ志つらといふは志先礼の字を用たるハ撰

上家といハ志殿の志つらといハ志つらを志殿の装束

一 愚あつ人を馬麻老といふは近年の志つらといハ

非もつらといハ志つらといハ志つらといハ志つら

志麻老の志つらといハ志つら

一 ゆめく他を十人といハ志つらといハ志つら

そのまゝといハ志つらといハ志つら

詞は努力トリヨウ力の二字を用ひ努力といふ力をつゞく張といひま  
 むるカは字心ココロのハカを入心ココロをゆふぬまの努  
 力の二字をつとめてま云は又心を用いたるにあきこ  
 和款あきよいめと斗もよむこ  
 一 つらうといふ詞ハ熟の字を書き情の字を用ひ候也  
 未熟はあき念を入をつらうといふ  
 一 尾オ筋コと云字を音まんビロウとよむ也(意字元  
 かう一字的訓ましかことよむ本かかこのまかこ  
 の老あきといひかかこ之布字ハ嗚呼とも鳥呼とも  
 書く老字菴が聲記ハ曰嗚人見人物之可憐者

則曰嗚呼字彙鳥見異則噪故以為鳥呼歎所  
 異也又盛囊抄應神天皇の由裝束の裾と云物を  
 尾のや引き扱ひしを戸の間よまこめ一耐尻筋と  
 物ありしよりまづ浦をこまハ用多ふたす日本紀ま  
 名元ざるゆへ盛神天皇の由耐裾ハ云々

一 昔の俗語ハおの抱扱の字を支務と云古書まん元  
 たり支ハさしつとよむ字ハ人の痒痛あり耐扱を  
 出してあきま人の詞をさしつより出る詞ハ  
古書ハ人の抱を  
さく(る)りま支務と云  
 あり抱の情用あり

一 辰をひると云を古代ハあきすといひ古今書

集字拾遺物語の類古き物語ありしなりと  
いあり名をとり今世女の詞はあはれをすると云は  
あり又源順が如名抄は放屁如名倍流と何り  
是本の詞也

一 陰莖インキマツをまらると云は近世の俗語はあはれ古代より  
名は古今著聞集五事談字拾遺物語の古き  
書にまらとあり源順が如名抄莖垂類の類は玉莖  
の二字を削りて如名をば出さば牛馬蹄の類は陰脈の  
二字を削りて俗に云麻良佐屋とあり如名抄順の時代は  
まらと云ふこと又今の世にまらの名をへること云は逃

和名抄は陰囊インナツの二字を俗に布久利フクリと記し陰核の  
二字をバ俗に云世師ノゴの古と記したり陰核ハヒの世に云  
きんは海の中のうろこことそのうろこを古ハ龜のこと  
いひて然れは海らの津を龜のこと云ハ称遠トナこれ  
らの名も有実何り何事も古今遠の事あり源  
順ハ村上天皇の比代天曆年中の人古今後卷の二  
保延五年四月廿五日畠馬部走り還テ引落敷頼冠  
鞆不殘一物剥取其装束又車等同取之追放敷  
頼拘其摩良走入小屋了々又古今著聞集は完  
は取當たる摩良もけづれれは又云一生不犯の

尼陀終の時人念佛を勧めれども念佛せざりて摩  
良がうろくと唱あうり死をみま

一人の安否を問ふ詞を貴人はいはし様嫌能といひ上掌  
小はは勇健といひを吹といはは堅勝といひ等掌よは  
は堅固といひ下掌小はは中掌といひて上中下の次  
身をかるもの古代より多くを今世の世の風俗とい  
おのめくといは何者の始て定りしるるに不審

一 入眼ニラガシといひ詞古きより作り物事の成物あるものを入  
眼といふあり是ハ画工の筆を常よりせらる詞に人形を  
獸等を画づく可眼の中は瞳を懸せざりて彩色を

こころしく終て後は眼中に瞳子を入れ之又木偶念を  
もま形を作り彩色終て瞳子を入りて佛像は瞳子  
を入れ并眼といは是又入眼これらありふれどよく  
物事の成物あるものを入眼といふ

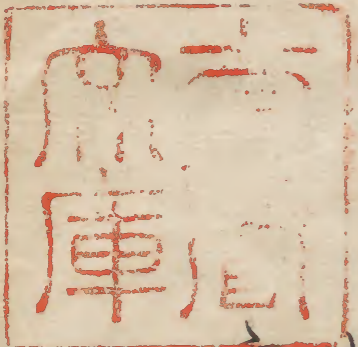
一 濫吹ランスイといひみづるに俗をいふこと古きなり 書言故事下字  
おホよをえたり

香カウを嗅ぐカるを香を嗅ぐといは是花のあはるいふあり  
かぐといふも穢しき詞といはるいふは或は物語梅が元の  
香タキの合タキの条 云わうこそいづくもあはるつゝむろくも

多めれ人このむよ合せぬいづるものさあはてをかき  
ありせぬいづるよけうあることおわりりき香をかぐと

いひこれバとて笑へり

一 大まろと云初はさうのあありてよの沙衣をたまの沙酒  
をたすみあぐくまハ賜ノ字又給ノ字こよハ貴人の  
字をいふふたまはつたまかおろまをあぐくまハ沙  
ノ字こころハ我思ふを思ひたる人らも思ひた  
まのあぐくまハ奉ノ字こころあつるよハ人  
うやまひあぐむむ村よハ初こ 物をたすむるをたふ  
とつたをりともあ  
ま又たびて又まかともつあつり皆揚の字  
五音のお通すておのこころいふあり  
古き書よ思ひまこ元孫かゆつりまこ元孫か心を在  
つ元孫かあこまこ元孫かあぐくまハ初あり是ハ人



に對するもさう初こまこ元の初を除くも月こま  
こ元の初をあつるこハ初こまこ元の初を  
こまこ元の初をあつるこハ初こまこ元の初を  
こまこ元の初をあつるこハ初こまこ元の初を  
古書よ イラク 意樂まるとま初あり意樂とハ我身よ我が身  
まをわら自満して意よまよむるをこま  
キダレ  
機嫌とまの今よ云沙機嫌能あつてま文字ハ辨玉  
より出しこ中阿含經よ預知機嫌ま又法華經  
方便品因縁釈之感應之機嫌ま

必欲略因強民以強國者其難矣  
 夫強國之要在乎民之富而民之富  
 在於農而農在於土而土在於德  
 德者國之基也德衰則國弱國弱  
 則民散民散則國亡此理之必然也  
 故君子必先慎乎德有德此有人  
 有人此有土有土此有財有財此  
 有用德者本也財者末也外本而  
 末則國必亡矣

